

# 昭和58年度ヒラメ放流技術開発事業

## ( 要 約 )

金田一拓志・工藤 敏博

この事業は、放流技術開発事業（ヒラメ班）として昭和55年度に新潟、富山、熊本の3県でスタートし、56年度に岩手、鳥取、57年度に山形、58年度から本県と島根、岡山の各県が参加し、58年度現在9県（14機関）により共同実施されている。

本事業の目的は、ヒラメの栽培漁業化に必要な放流効果の実証であり、人工種苗の大量放流と、ヒラメという共通のテーマに各県が共同で取り組むことにより、できるだけ早く目的を達成しようとするものである。

事業内容は、種苗放流に必要な種苗の生産並びに標識に関する事、及び放流後の追跡調査並びにヒラメの資源生態に関する調査に分かれており、前者を当センター魚類部が、後者を水産試験場調査部が担当することになったので、次にセンター担当分の概要を記す。

なお、詳細は「昭和58年度放流技術開発事業報告書（ヒラメ班）、青森県、岩手県、山形県、新潟県、富山県、鳥取県、島根県、岡山県、熊本県、昭昭59年1月」を参照されたい。

### I 種 苗 生 産<sup>\*</sup>

秋田県栽培漁業センターより受精卵約235万粒の譲渡を受け種苗生産を行った。

### II 中 間 育 成

放流用種苗として110mmサイズ5,129尾、120mmサイズ10,266尾、130mmサイズ6,162尾を生産し、日本栽培漁業協会・宮古事業場産の130mmサイズ4,082尾を含めて、これら全個体に標識（アンカータグ+ディスク及びアンカータグのみ）を装着し、日本海（車力地先及び十三湖）へ放流した。

### III 無眼側躯体部における色素発現

本事業の共通テーマとなっている無眼側躯体部の着色（無眼側色素異常）の標識としての有効性を検討するため、人工種苗の無眼側に発現する黒色素胞を追跡調査した。

---

\* 種苗生産の詳細は本誌「ヒラメ種苗量産試験」の項を参照のこと。